

ふるさと

旅人の「故郷を思ふ歌・二首」

わ さか

くた

1) 我が盛り いたく降ちぬ

くすりは

雲に飛ぶ 薬食むとも

またきちめやも

卷五―八四七

（解説）私の盛りの時は過ぎ。すっかり衰えてしまった。不老長寿といわれる薬を飲んだところで若返ることはあるまいに。

・「いたくくたちぬ」は「長年月がたった」

・「雲に飛ぶ薬」とは中国の故事「不老長寿の薬」と考えられていたようである。

・「をちめ」とは「若返る」の意。

くすりは

2) 雲に飛ぶ 薬食むよは

みやこ

あ み

都見ば いやしき我が身

# またきちぬべし

卷五―八四八

(解説) 不老長寿の薬を飲むよりはひと目、奈良の都を見られたら若返るだろう。

(写生地) 旅人に「都」と詠われた奈良の平城宮(和銅三(710)年、藤原京から遷都)跡と背景に奈良のシンボルの一つ、奈良公園の東端に位置し山焼で有名な若草山と麓には東大寺を描く。(杏花)



・「平城京跡所在地」 奈良県奈良市二条大路南三丁目

・天平二（730）年、正月十三日（太陽暦では二月八日）に当時、九州・  
吉岐・対馬を治め。外交・国防のために置かれた大宰府の帥（長官）だっ  
た大伴旅人の邸宅で管下の国司こくしや高官を招いて宴が開かれたその時に出  
席した者たちが、それぞれ「梅」を題材にして歌を詠みあった。大伴旅人  
も主人名で詠んだ次の歌がある。

我が園に 梅の花散る ひさかたの  
天より雪の 流れ来るかも

卷五―八二二 作者…主人（大伴旅人）

（解説）この我らの集うわが園に梅の花が舞い散る。それとも天から雪が  
流れ落ちてくるのであろうか。―などの三十二首（巻5―815～84  
6）の「梅花の歌」が詠われている。

・万葉集にはこの三十二首の歌群に続いて本歌の題材「梅」と直接関係の  
ない枠外で作者は大伴旅人との説のある冒頭の歌（1）、（2）の歌題・員  
外「故郷を思う歌二首」がある。

・この二首は旅人邸宅の梅園で一同そろって春正月の宴会を催している最  
中に旅人がそれに誘発されて故郷、奈良が恋しくなった故の作歌でなから  
うかとの説がある

・大伴旅人が大宰府の帥（長官）に赴任したのは、神亀四年（七二七）も  
しくは五年のこととされている。大宰府は当時の都・奈良（平城京）から

は陸路では十四日、海路では三十日を要する遠い地にあったことなどから  
「遠の朝廷」とおみかどとも称せられた。

・大伴旅人が大宰府に赴任した際に部下と交わした贈答歌で大宰府帥としての務めを立派に果たそうとする気概が感じとられる次の歌がある。

・やすみしし わが大君の 食す国を

やまと

は大和も こころも同じとぞ思うふ

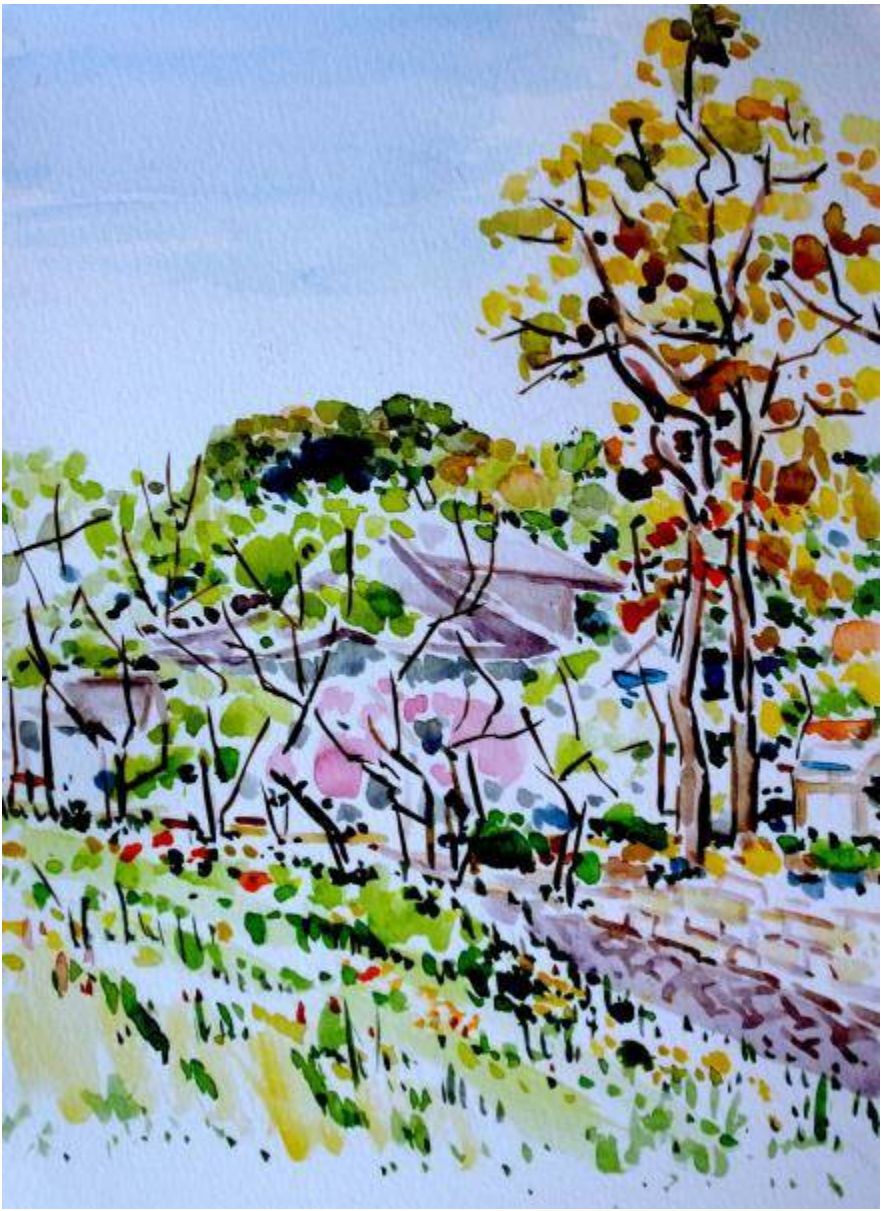
卷六―九五六

(解説) わが天皇の治めてをられる国は、大和でも、この筑紫でも同じであると思いますよ。

・しかし赴任地は都から遠く離れた鄙ひなびたところであり、すでに六十歳代半ばの老境で、生きて帰京できるかわからないと思う旅人に、さらに赴任して、ほどなくして同伴した愛妻と病死したことなどの不幸が重なることから、都を恋い焦がれたらしく万葉集には、この二首(巻5―847、848)の歌以外に数首の望郷の歌が残されている。

・筑紫の大宰府政庁(都府楼とも呼ばれた)跡は博多湾から約15km南内陸部(現・福岡県太宰府市観世音寺)に位置し現在、記念公園として整備保存されている。大宰帥・大伴旅人の邸宅は大宰府政庁の北西に隣接する坂本八幡社付近にあったとの説がある。

(写生地) 大宰帥・大伴旅人邸があつたとの説がある八幡社(福岡県太宰府市坂本) 一帯を描く。



(杏花)

(参考文献) 林田正男著「万葉の歌」 古都大宰府保存協会「都府楼」他